



Murata High School 100th Anniversary

# 百年通信

No.3 2024, 6, 10 発行

創立100周年記念実行委員会

## 村田町立の定時制高校として 1948(昭和23).7.8 宮城県村田高等学校 開校

教育基本法・学校教育法の制定



➡ 6・3・3・4制の学制改革

創立以来25年間続いた女学校から一変、働きながら学ぶ男女共学の定時制高等学校として再出発



### 開設当時の状況



1948(昭和23) 募集定員:夜間部 普通科男子40名  
昼間部 家庭科女子40名

**戦後の混乱期** «旧青年学級修了者は無試験 新制中学校卒業生は形式的なテスト»  
男子は定員を上回るほど多数で、応募者のほとんど(50名)を入学させた。年齢もまちまちで新卒の若い先生より年上の生徒もいた。女子の入学者は37名であった。(第1回生)

1950年4月 昼間部 普通科男・女40名設置 [昼間部 家庭科40名 夜間部 普通科40名] (第3回生)

**苦難の学校経営** «教員不足で授業は月・水・金の週3日 4年間通学し続けることは困難だった»  
「時がたつにつれ、働きつつ学ぶことの辛さが、毎日の出席人員に反映して、開校2カ月で1/3の落伍者が出て、9月に補欠募集も行ったが、時間欠席者が増加し、寒くなるにつれて教室は寂しくなってきた」(第1回生の話) ➡ 第1回生で卒業したのは男子17名のみ

第2回生は71名中、卒業したのは23名  
第3回生も88名中、卒業時は43名だけ



### 定時制高校の悩み

## 定時制の一週間の授業日数 ➡ 全日制課程設置の要望高まる

- 1948(昭和23) : 週3日(月・水・金)
- 1949~1950 : 週5日(月・火・水・木・金)
- 1951~ : 週6日(月・火・水・木・金・土)
- 1952 : 昼間部4年女子は週3日
- 1953 : 昼間部4年男女は一学期のみ授業
- 1954 : 昼間部4年男女はホームプロジェクト(在宅学習)



➡ 昼間部は3年間で必要な単位を修得

**生徒の思い**「昼間部とは変則的なカリキュラムであった。定時制は

4年間であるが、3年間で授業は終了してしまい、あと1年は何をやってもよいことになっていた。でも卒業証書だけは貰うことができなかった」「僕は、この制度が不思議で納得ができなかった。僕らは3年で卒業したいと痛切に感じ、生徒だけの全日制促進運動を開始した。町の有力者の協力を得るために各家を訪れ、全日制に切り替えてもらうように運動した。それも自主的に生徒の手で運動計画を立て、人員を割り当て戸別訪問して請願書を手渡すなど4カ年に渡って数十回の運動を繰り返したが、その運動も空しく上級生と同じ道を歩むこととなってしまった」



### 生徒会誌『雑木』創刊 [1953(昭和28).3.28]

➡ 生徒会誌名は募集選択により、夜間部4年生の誌名に決定  
由来「幾度切られても屈せず伸びようとする強い意志力と素朴な美しさと庶民的な親しみ」



# 新制高校三原則〈学区制・男女共学制・総合制〉を実現した 村田高校

## 新制村田高校 創成期の思い出



1953(昭和28)年度卒業生(3回生) 談

戦後の世相の乱れもまだとれぬ昭和24年4月、定時制夜間部の1年生として48名が入学しました。今でも残念に思うことがあります。共に机を並べて学んだ学友が4年間の内に1人欠け2人欠けして卒業時には1/4の12名だけとなったことです。それには大きな理由がありました。私は中学校を卒業して即入学したので16歳でしたが、20歳から30歳近くの生徒が多く入学しており、在学中に結婚した生徒もいれば、子持ちの生徒も何人かいました。どうしても家庭の事情で退学せざるを得なかったのでしょう。4年間、昼働いて夜学ぶということは大変なことなんだと思います。

当時の夜間部は電力事情が悪く、授業中に何回も停電、バッテリーを使って勉強したことも大きな思い出です。私は家業を手伝いながら夜間部に通い、身体の自由もある恵まれた環境にあり、1日4食の4年間でした。体育のバレーボール等は野外で校庭に照明灯を取り付け、それでも楽しくバレーをやったものです。夜間学校給食のはしりでしょうか。脱脂粉乳のミルク、みんな美味しく飲みました。その頃に村高で大変盛り上がったのが文化祭でした。特に演劇は町民に大変受けて私も俳優として、4年の時は大道具係として良い経験をしました。また、スポーツでは4年間バレー部で活動しましたが、昼間部と夜間部が合同で村高チームでしたので、昼夜の合同練習にも参加し、当時の村高は仙南定時制の大会でも常に上位入賞したものです。

## 県立移管前の学校生活



1965(昭和40)年度卒業生(15回生) 談

昭和36年4月に入学しましたが、学校に入らずに働きたかったその頃の私です。親に高校に行きなさいと言われ入った村高は、町立でしかも定時制でした。私たちは昼間部で普通高校同様3年間で勉強し(1年間は在宅学習)、夜間部の人たちは4年間かけて勉強して卒業式は一緒でした。

学校の建物もその当時の小学校と続いていた古い校舎でした。生徒数も少なく、私たちのクラスは12名だけで、男子は5名しかいませんでした。他の学年も同じくらいで、生徒数が少なかった分、先生方にはよく教えていただきました。和気あいあい、とても楽しい学校生活を送れたことは大変良かったなと思っています。皆で力を合わせなくては文化祭も運動会もできなかったのも、先輩も後輩もなくて、とても仲良く、先生方もまるで友達みたいなところもありました。

部活動はソフトボール部に入って、少ない部員で頑張っていました。小学校の校庭から続くグラウンドで、バレー部・野球部と一緒にしたし、小学校の子供たちとぶつかったりするなど、なかなか大変でした。ソフト部の練習を終えてから、夜間部で勉強する人たちのために、毎日コッペパンを半分に分けて、ジャムやピーナッツバターを塗ってから帰りました。それを夕食として勉強していた人たちがいました。とても頑張っていましたし、私たちが帰ると入れ違いになるので「しっかり頑張ってるね」と言って別れる日々でした。

## 「汗」について (内田より)

ヒグラシ鳴く夏休み後半、早朝・午前中は気合いもろとも部活動。午後は『地理』の課題《地域調査》に時間を費やした。「我が郷土の史跡・文化財でも調べてみるか」と思い立ち、実践したのである。方法は「文献で史跡・文化財を調べ、現地・現物を確認し、周辺の様子を観察(スケッチも描く)する。その上で往時の状況を推論(独りよがりの夢想)し、レポートにまとめる」といういたって単純なものだ。郷土の史跡・文化財のすべて(23カ所)を自転車で炎天下、連日汗だくになりながら回りきった。調査も残り3カ所となり、平安時代のものと推定されている塚沢横穴墓群の調査中のことであつた。墓群近くでおどろおどしい『蛇(へび)に睨(にら)まれた蛙(かえる)』に遭遇した。驚愕の顛末(てんまつ)を記す。(High School Question 1: 宮城県で最北のは? Answer: \_\_\_\_\_ 高校)

八瀬川上流、東側の段丘面の奥から墓群のあるブナ林に入った。陽が遮られ、暗くなってきたところで、一点を凝視しているヤマガカシを見つけた。蛇の視線の先を見ると、な!な!何と!どでかいヒキガエル。蛙も蛇を見つめている。蛇も蛙を見続ける。蛙は動かない(動けないのか!!)、蛇も動かない。睨み合いの緊迫度が高まり、それを見ているウチダの鼓動も高鳴り、動けない。三者の半端ない緊迫感は、ただ事ではなかった。蛙と蛇の距離1.5m、ウチダと蛇・蛙との距離はともに3m、ブラックホールが出現したかのような二等辺三角形の空間であつた。あまりの緊張で、失禁しそうになった瞬間、ヤマガカシが、どでかいヒキガエルに噛みつき捕らえ、体を異様に盛り上げながらゆっくりと飲み込んでいった。辺り一帯は、じっとりとした空気に包まれ、ブラックホールが周囲を吸い込んだ(ように見えた)。しばらくして、呪縛は解かれ、ブラックホールは消えたが、危うく平安時代にタイムワープさせられるところだった。危なかった。見届け人となったウチダ、冷や汗が止まらず、心拍数180の興奮状態のまま、家までの15kmを急いだ。その夜、ヤマタノオロチに一飲みみにされてしまう悪夢に一晚中うなされた。不快な寝汗の感覚は今もある。(HSQ 2: 宮城県で最も日の出が早い高校は? A: \_\_\_\_\_ 高校)

さて、生徒諸君。蛙が蛇に睨まれ、逃れられなかったように、君たち高校生は勉学から逃れることはできない。世の中に飲み込まれてしまわないよう、汗をかきながらでも勉学に向き合い、学力を高めなければならない。

「生きる力」は汗をかいた分だけ身につく。

